在日コリアン１世における母語学習

－NPO 法人京都コリアン生活センター「エルファ」でのインタビューを中心に－

崔　善　今

First generation Koreans' mother tongue learning in Japan: from interviews at a NPO Kyoto Korean life support center (LFA)

SAI Zenkon

はじめに

法務省入国管理局によると、2006 年 12 月末現在で日本に在住する外国人登録者数は 208 万 5000 人に達し、その国籍は 188 カ国にわたる。その 28.7%を占めるのが韓国・朝鮮人（在日コリアン）であり、約 59 万 8000 人である（法務省入国管理局、2007）。65 歳以上の在日コリアン高齢者は 84,017 人（男性 36,451 人、女性 47,566 人）であり、在日コリアン（在日コリアンとは、姜在彦によると、「日本の植民地支配に起因して日本に住むようになった存在であるのが在日コリアンの 1 世であり、さらに日本で生まれ育ったその子孫が 2 世、3 世、4 世である」（姜有彦『在日朝鮮人渡航史』1996））の高齢化率は約 13.7%を占め、在日コリアン社会も高齢化社会に突入しようとしている。

また、現在存命している在日コリアン 1 世はおおよそ 10 歳前後の就学期に両親に連れられて日本に渡ってきた人々が多い。彼らは貧困や差別のために学校教育を受けていないものが多く、学校教育を受けたとしても日本語や日本文化の教育が主体であった。成人してからも日本で社会生活を送るために日本語の学習を余儀なくされ、また自らは朝鮮民族であるとのアイデンティティを保持しているにもかかわらず、社会からの抑圧や日本語を用いて生活する必要があったことなどから、自らの民族文化や言語の保持は困難な状況であった。すなわち、自分は朝鮮民族であるのに 母語（朝鮮語）の読み書きができないとの葛藤にさいなまれる世代であった。

第 2 次世界大戦後 65 年を経過し、これらの在日コリアン 1 世はほとんどが高齢者となっている。彼らの中には高齢化と共に、日本語を忘れ、母語以外でのコミュニケーションが困難となりつつある者も多い。他方、2000 年 4 月から日本国内に居住するすべての外国人高齢者も日本人とともにサービス利用者となった。そして在日コリアンもその保険サービスが適用されることから、エスニシティを尊重する在日コリアンの事業所も誕生した（田中宏「日本の社会保障、学校教育と国籍」、2006）。すなわち 2000 年前後から在日コリアン社会では 1 世高齢者の文化・生活背景に合うサービスを提供する民族団体、ＮＰＯ法人が日本各地に設立されていったのである。本章で紹介するＮＰＯ法人京都コリアン生活センター「エルファ」（以下より「エルファ」

と略称)もその一つである(ＮＰＯ法人神戸定住外国人支援センター『在日マイノリティ高齢者の生活権』2005)。これらの介護福祉施設においては、生活支援や介護の他、交流会や勉強会の形で文化活動が行われている。その一環として在日コリアン１世高齢者はこれら介護福祉施設において様々な形で母語学習を行っている現状がある。

在日コリアン１世の母語学習は、戦後、夜間中学校や自主的な学校であるオモニ(母親)学校などで行われてきた。内山一雄は「夜間学校やオモニ学校なども識字運動の一環として、その形態、内容、方法の違いにあれ、『奪われた文字を奪い返す』意味での活動である」と言っている(元木健、内山一雄『識字運動とは：国際識字年を機に』1989)。要するに、植民地支配による差別と貧困により非識字者として生活してきた、または日本の学校で日本語を学習し、朝鮮語学習を放棄せざるをえなかった在日コリアン１世たちが朝鮮語を学習する意義は、奪われた自分の母語を取り戻すためことにあった。

では、何故在日コリアン１世が高齢になってから、しかも日本の社会で自分の母語（朝鮮語）を学習しているのかについて検討することが本研究の目的である。

本論では、主に在日コリアン１世のライフ･ヒストリーを中心にインタビューを行う。具体的にはインタビューにおいて「自伝の語り」を中心とし、その中から「母語学習」について考察していく研究方法をとっている。

調査対象としては、介護福祉施設ＮＰＯ法人京都コリアン生活センター・「エルファ」（以下「エルファ」と略称）を利用している。

エルファには124人の在日コリアン１世の高齢者が在籍している。

同じ在日コリアン１世でも過去の教育歴や学習情況などの背景は様々である。そのなかで一定のパターンに分けると

A：出生地の朝鮮でも日本でも公教育の就学歴のないもの

B：出生地の朝鮮では公教育の就学歴があるが、日本ではないもの

C：日本でのみ公教育の就学歴があるもの

D：朝鮮でも日本でも公教育の就学歴のあるもの

となる。上記の中で主なパターンはＡであり、パターンＤに属する人は稀である。実際にエルファではＡ 99人、Ｂ 16 人、Ｃ９人、Ｄ０人となっている。そこで本研究ではＡ、ＢおよびＣの各々に属する在日コリアン１世高齢者から各々1名を抽出し、計３人を対象にした。

在日コリアン１世の多くは高齢化とともに母語以外のコミュニケーション手段を失いつつあり、在日コリアン１世に対するフィールドワークに於いては朝鮮語での意志疎通は必須の要件となりつつある。本研究においても必要に応じて朝鮮語でインタビューを行った。

また、在日コリアン１世の言語(朝鮮語、日本語)についての関連資料を補足的に加え、参照しながら本研究の目的を実現する。

在日コリアン１世にとっての言語問題

言語形成期を朝鮮半島で過ごして来日した１世の場合、朝鮮語と日本語を併用するが、生活

の中で朝鮮語のみが選択される場面は、バイリンガルである１世同士の会話などに限られる。集住地域に生活する１世の場合、１世同士のネットワークを形成して生活する場合が多く、両言語を併用したユニークな言語運用が観察される。「チャンポンマル」と呼ばれる日本語と朝鮮語の併用現象は、主に家族や友達などの仲間意識によるコミュニティ・コードとみなすことができるが、日本語と朝鮮語の言語構造（文法や語彙）の類似性による独特な言い回しが存在する。

１世の言語を個別的に見ると、彼らの朝鮮語には来日当時の地域方言(慶尚道、全羅道、済州道)がみられ、朝鮮半島ではすでに使用されない音韻形態や語彙などが多く残存している(任栄哲『在日･在米韓国人及び韓国人の言語生活の実態』1993)。

識字については、１ 世の場合、植民地支配による差別と貧困により朝鮮語・日本語の双方に関して識字率が低く、自分の名前を書けないのが現状である。

在日コリアン１世における母語学習

在日コリアン１世が幼少期から高齢期に至るまで母語と日本語について､ライフ･ヒストリーの中でどのように学んできたのか、それがどんな影響を与えていたのかという問題を深めて考察していく。本章で検討対象となるのは､「エルファ」の在日コリアン１世の３人の自伝の語りである。序章で述べたように､「エルファ」にいる在日コリアン１世を過去の教育歴や学習情況などの背景によって類型化すると

A：出生地の朝鮮でも日本でも公教育の就学歴のないもの

B：出生地の朝鮮では公教育の就学歴があるが、日本ではないもの

C：日本でのみ公教育の就学歴がある

に分けられることから、異なるパターンに属する在日コリアン１世の３人を選んだ。また、在日コリアン１世の３人に自伝の語り手のポジションをとらせる伝記作者的立場に立ち、３人が他者のコントロールを受けずに自由に語らせる技法という点を重視した。そして本章では、この技法の実践を｢会話｣という概念ですくい取っていこうと考える。以下では、３ 人の在日コリアン１世のライフ･ヒストリーを手がかりに、生活における言語学習を検討する。

渡日前後の学習経験

在日コリアン１世の場合、渡日前、渡日後を問わずに学校教育を受けた者は僅かである。エルファの在日コリアン１世サービス利用者 124 人のうち､学校教育を受けた人は僅か 25 人である(渡日前就学者：16 人、渡日後就学者：9 人)。この節では、大きく朝鮮半島での幼少期学習と日本での学習に分けて在日コリアンの学校での学習を説明していきたい。

今回インタビュー調査の対象である A さん、B さん、C さんの中で、A さんは未就学者であるが､B さんは幼少期に朝鮮半島での小学校への就学経験があった｡C さんは日本で朝鮮学校と日本の公立学校で就学した経験がある。

１．朝鮮半島での就学

在日コリアン１世の渡日前の言語については、大きく｢日本語の使用｣と｢朝鮮語のみの使用｣

の二つに分けられる。「日本語の使用」者は、一般的に幼少期朝鮮半島で学校教育を受けたとき、日本の植民地政策により学校で日本語を強制的に学習、使用されたものである。もう一つの「朝鮮語のみの使用」者は、朝鮮半島における未就学者で、学校教育を受けてないものである。

事例１　Ａさんについて

―　朝鮮では学校に行ってましたか？
「全然行ってない。昔な、田舎はな、女が学校へ行ったら生意気や言って、父が反対しよった。上の兄は行ったけどな。
―　学校に行きたかったですか？
「そりゃ、行きたかったよ。1回新しい学校ができて、そこへ自分勝手に行ったんや。そしたら、チョソンサラミ　イルボンマルド　ハゴ（朝鮮人が日本語も使っていて）、鉛筆、机、雑記帳って言ったかな、それ2つ覚えて。うれしかった。」
―　その後は、行ってないですか？
「母に怒られて二度と行けなかったな。その後お父さんが日本に渡ると言い出したので、親に連れられて日本に来たから。」
―では、朝鮮では日本語は使ってないですか？
「うん、知らんわ。田舎では生活が苦しいからな。日本に来るまで日本語はまったく話せなかったや。」

未就学の主な原因としては、貧困、男尊女卑の思想などが理由として認識できる。また就学への未練への思いは、今日高齢になった彼（彼女）たちにどんな影響をもたらしているだろうか。エルファにはＡさんのように生活が困難であることや男尊女卑で女性未就学になった人が在日コリアン在籍者124人中99人を占めている。未就学は在日1世コリアンが読み書きができない主な原因ということなる。

事例２　Ｂさんについて

―　さっき、ハルモニは、むこうで小学校5年まで学校に通ったとおっしゃいましたのが、朝鮮語ばかり使っていましたか？
「いいえ、小学校5年生の2学期からは日本語を教科書に入れていたよ。」
―　教科書に日本語が？どんな内容でしたか？
「日本語を勉強させ、うん、歌も朝鮮語歌を歌ったが、突然全部日本語にな。運動会に『コガネムシは金持ちだ』とか歌ったことがあるな。あんたは知るはずがないな？」
―　生活の中でも日本語を使いましたか？
「いやあ、家では朝鮮語しか使わないよ。日本語を使うはずないやん。日本語使ったら親に殺されるもん。だから、学校以外は全部朝鮮語や」

ここでは、日本の植民地政策による学校での日本語学習は強制的であり、学校内に限られて使用されたものであり、朝鮮人の生活なかでは自分たちの母語である朝鮮語のみ使って生活したことが分かる。「使ったら親に殺される」ということから朝鮮人が第二言語である「日本語」

に対しては拒否したことがはっきりと証明される。

事例３　Ｂさんについて

―　日本語は上手に話せましたか？ 「うん、学校では半学期しか習ってないのであまりできなかったね。その後、夜間学校でも１年習ったことがあるわ。」 ―　朝鮮で夜間学校も通いましたか？自分で選んだのですか？」 「いやあ、私は小さい時は勉強が嫌いだったさかい中学校へ行きたくなかったの。しかし、うちの母は教育が熱心な人で、女はもっと勉強しないとだめと言って、むりやりに夜間学校に行かせたの。今も勉強は嫌いだけどな。(笑)」

Ｂさんの親はどうして勉強が嫌いである子どもを夜間学校までいかせただろうか。Ｂさんの話によると、母親は幼い頃ソタン(書堂)で男の子と一緒に勉強したらしい。そして男尊女卑である社会だからこそ女は学習しなければならないと口癖に言ったそうだ。このような意識を持っている母親は当時の朝鮮半島では珍しいことであろう。Ｂさんのように学校や夜間学校に就学した人は少数である。ここでもＢさんは自主的に日本語の勉強を励んだわけではないのである。

事例４　Ｂさんについて

―　学校も日本語の勉強も強制でしたか？ 「そうそうそう。でもな、近所に優子という私と同じ年の日本人女の子がいて、よく一緒に遊んだよ。」 ―　言語は日本語でしたか？ 「そうね。だから学校で勉強するよりは優子にもっと教えてもらった気がする。」 ―　勉強はきらいたけど、何か好きなこととかありましたか？ 「そうね、手が器用でもないが、いつも何か作るのが好きだったな。例えば、刺繍とかもの作りが好きで・・・」

学校での強制的な日本語学習に対しての反発はあったが、日本人友達との自然な付き合いで日本語が上手になった事例から、自発的学習が非常に効率的であることが判明する。しかしＢさんのように日本人友達と付き合った人は僅かであろう。

在日コリアン１世の渡日前の使用言語については､｢朝鮮語のみの使用｣､｢日本語の使用｣､｢朝鮮語・日本語使用｣などである。

２．日本での就学

在日コリアン１世の中で就学年齢時期に渡日した者たちにおける、日本での就学は大きく三つのパターンにわけて考えられる。親が渡日後の意識変化により自分の子どもを就学させようとしたもの、未就学となったもの、学校以外のインフォーマルな家庭教育など様々なケースがある。また、就学年齢に達する前に渡日して、日本で育った１世には敗戦後朝鮮学校や日本の公立学校、夜間学校で学習したケースがある。

事例５　Ａさんについて

―　学校のことを聞きますが、日本では学校にいきましたか？ 「日本に来ても学校なんかいかしてもらわれなんでん。私は学校は行きとうて行きとうてね。涙でよったよ。お父さんは女の子は勉強すると生意気なって他所嫁いでいったらコンバンジョソ　アンデンダゴ(生意気になっていけないから)。 ―　では、日本語はどこで勉強しましたか？どのくらいしゃべりますか？ 「日本でお父さんの炭焼き仕事を手伝ってん。日本人家でも手伝いしながら覚えてん。せやけど、字は書けへん。勉強せんさかい、あほになったん、親のせいや思うねん。」 ―　日本語ができないのによく日本人の家で働きましたね。 「言葉が分からへんさかい、よく叱られ、叩かれたなぁ。今も思うと寒気がする。」 ―　ウリマル(朝鮮語「私達の言葉」の意味)は書けますか？ 「ウリマルも書けへん。名前も書けへんだったが、うちあほやねん。」 ―　子どもには学校に行かせましたか？ 「戦後男の子には高校まで行かせたげどね、女の子には小学校２・３年までしか行かせてへん。子どもが６人いったさかい、生活がきつくてなぁ」

渡日後も男尊女卑の思想から未就学のものもある。しかし、日本の社会で生きていくためには第二言語である日本語習得が必要になる。Ａさんは日本人の家でお手伝いする際に日本人から教われたと思われるが、耳で習ったことにより、日本語及び朝鮮語の文字は知らない。生きるための手段であって自ら学習に望んだわけではなかった。そして、自分の子どもには同じ道をたどって欲しくない思いから娘にも学校にいかせたことを伝えてきた。

事例６　Ｃさんについて

―　赤ちゃんの時に日本に来て、幼い時、学校に行きましたか？ 「そうですね。５歳の時に終戦を迎えて、その後あちこちで朝鮮学校が建てられたので学校にはいきましたね。」 ―　ずっと朝鮮学校に通いましたか？ 「いいえ、小学校１年までは朝鮮学校だったが、２年生から高校までは日本の学校を出ましたね。」 ―　そしたら、ウリマルも日本語もお上手でしょうね。 「まあ、家で親同士はウリマル(朝鮮語)で話したので聴き取りはできますが、殆ど日本語を使いました。また外では日本語ですので・・・」 ―　日本の公立学校に通う時、いじめとかなかったですか？ 「え、通名を使ってもすぐばれてしまいました。それからはずっといじめられましたね。キムチ臭いとか、朝鮮人が嫌いとか日常茶飯のように言われましたよ。」

Ｃさんは赤ちゃんの時に渡日したので、年齢が在日コリアン２世とあまり変わらない。戦後まもなく朝鮮人たちは子弟のために朝鮮学校を造り、自分の民族文化、言語を教えた。しかし、当時日本政府による在日朝鮮人民族教育の弾圧に襲われ、日本の公立学校へと転校した者もいるが、ずっと朝鮮学校に通った人もいる。その結果就学期前に渡日した１世では「日本語のみ使

用」する者と「朝鮮語・日本語使用流暢」な者が存在することとなった。

渡日後生活のなかでの学習経験

在日コリアン１世は第二言語である日本語に長年の日本での生活のなかで慣れ親しむようになった。インタビュー調査をする時も、A、Bさんとも朝鮮語と日本語を併用して話をしたが、日本語のほうが多かった。Cさんの場合はほとんど日本語で対話をした。ここでは、日本語になれている在日コリアン１世にとって母語である朝鮮語についてどう思っているのかを分析してみたい。

事例 10　A、B、Cさんについて

―　家では日本語と朝鮮語、どちらを使っていますか？
Aさん：そりゃ、日本語だな。子ども達は朝鮮語が片言しかできへんさかい。
Bさん：息子家族と一緒に住んだ時は、息子夫婦も孫たちも日本語しか話せないのですべてが日本語ですね。
Cさん：もちろん日本語です。私自信が「キムチ」とか「テンチャン(味噌汁)」とか日常単語しかできないもんですから。」
―　近所で同胞(同じ在日コリアン)とは何語で話しますか？
Aさん：日本語と朝鮮語が混じっています。日本語の方が多いでしょう。
Bさん：混じっている。
Cさん：恥ずかしいですが、完全に日本語ですね。
―　朝鮮語に何か違和感を感じていますか？
Aさん：今はたまに日本語が思い出せへん。ボケてきたかな。
Bさん：やっぱり何でも慣れるもんかなぁ。違和感より日本語のほうが便利ですから。
Cさん：そうですね。朝鮮語が分からないので違和感を感じますね。

日本での生活が 60 年～70 年経った今は、日本語を使うのが便利となり、在日コリアン家庭での朝鮮語使用は益々少なくなり、在日コリアン１世と子どもとのコミュニケーションは第二言語である日本語で行っている家族が増えつつである。また、近所の同胞たちとは日本語と朝鮮語が混じっているか、日本語のみでなっている。かつて朝鮮語が堪能だった在日コリアン 1 世も生活の中で日本語が便利であるゆえ、朝鮮語を疎外している。更に、朝鮮語を少し、或はまったく知らない在日コリアン１世は朝鮮語に対して親しみを感じられないのが現状である。

現在の母語学習

上で在日コリアン１世が母語である朝鮮語に対して疎外する、違和感を感じる、使用度が低いことが判明したが、面白いことに現在在日コリアン１世たちは様々なところで母語である朝鮮語の文字の読み書きを学習する姿が見られている。第三節では主に在日コリアン１世たちが、ＮＰＯ施設「エルファ」と在日コリアンによる自主学校であるオモニ学校で実践している母語学習を比較しながら分析していきたい。特に 3 人へのインタヒューを通じてエルファでの学びを中心に書いていく。

１．母語学習への再認識

母語学習について３人へ次のように質問した。

事例 11　Ａ、Ｂ、Ｃさんについて

―　高齢になって、何故今朝鮮語の文字の読み書きを習っていますか？ Ａさん：学校に行けなかったことがずっと無念であってね。せめて自分の名前でも朝鮮語で書きたくてさ。奪われた言葉や文字を取り戻すんや。朝鮮人は「朝鮮人のまま」生きるのよ。 Ｂさん：私は、昔朝鮮半島で朝鮮語文字を習ったが、現在の本とか新聞を見ると文字が少し違うので読めないものがあります。文字も単語も変化しつつありますね。だから悔しく４年前から習い始めましたよ。勉強したら本もよく読めるしね。 Ｃさん：小さい時に、少し朝鮮語を勉強したが、今はさっぱり忘れまして・・・この何年間「韓流ブーム」で韓国ドラマを見ているが、私も言葉ができたらいいなあと思ってきました。そして、今主人も誘って「ケナリ」に通ったり、家でも勉強していますよ。

インタビューからＡさんのように幼い時から貧困、男尊女卑の精神、親に連れられて渡日して、言葉も文字も奪われ、ただ黙って働くことだけ余儀なくされた人々が奪われた文字を取り戻すことから母語を再認識するようになっている。Ｂさんのように朝鮮半島で就学した者は、一応文字は知っているが、時代の変化によって文字も変化したことから母語を再認識し、学習している人もいる。Ｃさんのように「韓流」に影響を受けたことから、また小さい時の思い出、やむを得ずに日本の学校に通わざるを得なかった様々な理由から母語の再認識が強くなっていることが考えられる。

２．九条オモニ（母親）学校での学習

戦後、在日コリアン１世は、夜間学校、オモニ学校で独自のカリキュラムを組んで識字を中心とした日本語および母語学習が受けたが、そこでの学習への参加は学習意識を持つ在日コリアン１世に限られていた。

本論では、九条オモニ学校での母語学習について簡単に紹介しておきたい。

JR 京都駅の南の東九条と呼ばれる地域の南部教会の一室に九条オモニ学校がある。教会周辺は京都において在日コリアンが最も集住している地域である。オモニ学校は 1978 年春に発足した。

当時の学校設立の趣旨には次のように述べている。

① 苦難の歴史の中で、今日まで、日本語の読み書きができないでいるオモニ達に学習する場を提供する。

② 母国（韓国・朝鮮）の言葉と文化を知らないでいる在日同胞に学習する場を提供する。

③ 在日コリアン１世と２世、３世青年そして日本人との親睦と交流の場を作る。

趣旨のようにオモニ学校は在日コリアンに日本語と朝鮮語の学習の場として作られたものである。

オモニ学校は、日本語教室と朝鮮語教室の二教室があり、現在も 80 人近い在籍者がるが、実際の出席者はその約半数とみられる。参加者の大部分は60代以上の在日１世のオモニたちだが、なかには結婚のため韓国、中国から来日した 20～30 代の若い人もいる。オモニの居住地域は、京都市内が多いが、中には京都市外から、滋賀県、大阪府から来ているオモニもいる。講師は、日本人を柱に在日コリアンと合わせて 12 人、すべてボランティア参加者である。

朝鮮語教室の存在はかつての日本帝国主義が、民族の言葉や名前までも奪った歴史があることからその意味がある。他方、オモニのほとんどが当初、朝鮮語の読み書きも満足にできず、母国へ手紙を書きたくても書けない、という現実があった。そのオモニたちに朝鮮語の読み書きを教える意味が改めて問われてくるわけであり、それを通じてオモニ学校のあり方を考えることができる。

実は、エルファのＣさんは夫が定年した後、一緒にオモニ学校に通って 2 年目になる。Ｃさんに教室の様子について次のように聞いてみた。

事例 12　Ｃさんについて

―　朝鮮語教室にはどんな参加者が多いですか。

Ｃさん：やはり在日１世の方が多いですね。また、私みたいに日本語はできるが、朝鮮語の読み書きができない人が定年後とか仕事の関係など様々なきっかけで来ています。

―　テキストや教師たちの教えはどうですか。満足していますか。

Ｃさん：韓国のテキスト、韓国旅行ガイドブックなど現地に行って役立つものをたくさん教えているのでいいなあと思います。在日大韓基督教であるせいかたまには韓国語（朝鮮語）で聖歌も教えています。（笑）　在日コリアンの先生もいますが、韓国人の先生もいるので、発音の違いもありまして、どちらを学んだらいいか混乱する時もあります。

オモニ学校の母語学習は時代の流れとともに大きく変化している。昔在日コリアン１世が耳で覚えた朝鮮語と現在のソウル言葉を標準とした韓国語との違いをＣさんは指摘している。どのテキストを利用するのかとどの教師が担当するかは参加者によって明らかに違ってくる。もちろん学習者の学習目的に応じてクラスを分けて教師を配置するが、学習者が多少戸惑うこともある。また、自分の学習意志をはっきり持った参加者であることも言うまでもない。実際の学校運営では宗教的な一面もあることも否定できないだろう。

とはいえ、重い差別の生いたちを背負いながら、たくましく生き抜いていく在日コリアン 1 世たちと文字を通して生きる意味をたしかめつつ歩んでいこうというのが九条オモニ学校である。

ＮＰＯ施設「エルファ」での学習

では、夜間学校やオモニ学校での母語学習と比較しながら本論の中心であるＮＰＯエルファでの母語学習をいくつかの分類に分けて詳しく述べていく。

「エルファ」紹介

ここで先ず、ＮＰＯ「エルファ」について簡単に紹介しておきたい。なぜならば、京都の在日コリアン１世の高齢者にとって「エルファ」は欠かせない貴重な居場所であるからだ。

エルファという言葉の意味は、昔から朝鮮半島でよく歌われた「에루화 좋구나(よっしゃという感嘆)」という朝鮮民謡での感嘆語であり、笑顔と喜びに溢れるという意味である。

在日コリアン１世の高齢化が進む中、長年日本で暮らしてきたハラボジ(おじいちゃん)、ハルモニ(おばあちゃん)達が少しずつ日本語を忘れ、母語である朝鮮語でしか表現できなくなった彼・彼女たちが社会から孤立、隔離され、朝鮮語を分からない家族からも断絶され、晩年独居生活を強いられて死を待つ存在になってしまった。この悲しい現実を前に何ができるか、1世の血と汗で築いた朝鮮学校で学ぶことができた２世、３世は、1 世の築き上げた遺産を継ぎ、いかに発展させることができるかを考え、仲間と真剣にその具体的行動に取り組みはじめたのが契機である。そして、1999 年の春から『우리 친구, 우리 음식, 우리 노래, 우리 놀이, 우리 환경（我々の友、我々の食、我々の歌、我々の遊び、我々の環境)』を揚げた「우리（我々の）介護研究会」をスタートさせ、故郷の言葉、文化、風習に明るい人材をヘルパーとして育成し、ホールヘルパー2 級の養成講座を開講し、法人設立前から担い手の育成を開始していた。

エルファは 2000 年に設立され、2001 年に法人の認可を受け「ＮＰＯ法人京都コリアン生活センターエルファ」は誕生した。ＮＰＯ法人化により指定居宅サービス事業者となり、介護保険法に基づいてサービス提供を開始した。

エルファの特色は、「在日コリアンのルーツと現状に基づいた介護事業」を明確に打ち出していることである。（エルファの資料に基づいて作成）

「エルファ」での母語学習

母語学習については、ディサービスの時間帯を利用して、月 1 回、1 時間程度朝鮮語の読み書き授業を行う。母語の読み書きができない在日コリアン 1 世にせめて自分の名前を書けるようにと 2 世達の思いから始めたが、文字を学ぶ喜びを味わった高齢者たちは自らさらに学びたいと声をあげ、その結果、朝鮮文字を書く練習を週 1 回、1 時間程度行っている。書く練習は脳の活性化や体操にもなって、健康にも良いと位置づけられている。

しかし、ほかの夜間学校やオモニ学校みたいにきちんと組まれたカリキュラムや教科書などはない。スタッフたちが朝鮮語の文字を大きく印刷して少しずつ書き方や読み方を教えている。また、実際の生活の中でよく使われている単語を選んで教えている。ごく自然でシンプルな学習方法である。

エルファでの学びについて 3 人にそれぞれ質問してみた。

事例 13　Ａ、Ｂ、Ｃについて

―　エルファでやっている母語学習についてどう思いますか？
Ａさん：うれしいよ。おかげでやっと自分の名前を朝鮮語で書けるようになったんや。ありがたいことや。（泪をこぼしながら）
Ｂさん：いいことだと思うよ。文字を分からない 1 世たちが高齢になって自分達の母語を学習するなんで夢にも思わなかったでしょうね。だけどな、自分の名前を書くことだけに止まったらだめだと思うよ。本を読めないせいか在日の歴史について正しく知らない

1 世も多いからね。少しずついろんなことを企画して学びたいですね。
Ｃさん：私はまだ 65 才ですから朝鮮語の単語量ももっと増やしてほしいですね。エルファに来ている高齢者の平均年齢が 80 歳なので限りがあることは理解していますが。ですからオモニ学校で勉強するしかなくて･･･

はじめでも説明したようにエルファに在籍している 124 人の在日コリアン 1 世の教育歴や学習情況などの背景は様々であるが、出生地の朝鮮でも日本でも公教育の就学歴のないものが主なパターンである。出生地の朝鮮では公教育の就学歴がある人や日本でのみ公教育の就学歴がある人もいるが稀である。また、朝鮮語で自分の名前が書けなかったことから書けるようになった喜びともっと単語量を増やしたい、文字だけではなく自分たちの「在日」歴史を正しく勉強したいなど母語学習への目的や目標も人それぞれであることが分かる。

このように、在日コリアン 1 世たちは、これまで自分の名前を朝鮮語で書くことができなかったが書けるようになったことによって「自分が朝鮮人である」アイデンティティを再確認することができていく。学習を通じ、共同学習者とともに自分史を語り、それを語り合うことによって共感しあう。

世代間交流での母語学習

在日コリアンの 1 世から 4 世たちが、エルファでどのような世代間交流をしているのか、エルファディサービスの一日観察や活動参加型調査をした。

スタッフは、在日コリアンの 2 世、3 世が主になり、それ以外に日本人のスタッフや看護師、地域医療センターからのボランティア、外国籍ボランティアなどいる。スタッフは日本語とハングルのバイリンガルで、利用者とのコミュニケーションも良好である。ハングルが分からない日本人や在日コリアン 2 世～4 世には事務局でハングル講座を受講させているが、一方では 1 世の高齢者たちから教えもらったりして自然に身につけている人もいる。

事例 14　A、B、C さんについて

―　朝鮮語を知らない次世代についてどう思いますか。
Ａさん：文字を書けないうちと同じだなあ。せやけど、うちは文字を書けなくても朝鮮語で話はできるさかいまだましや(笑)。日本社会で生きるためにそうなったかもしらんけど、在日として朝鮮語ができないとあかん。うちは 83 歳になって名前をかけるようになったから、これからでも朝鮮語を学んだらいいや。遅くないよ。
Ｂさん：残念だと思うが、やる気があれば教えますよ。趙さん(エルファのスタッフ、在日 3 世、26 歳、アメリカでの生活が長かったため日本語も完璧ではない。現在朝鮮語は中級くらい)はこの一年間結構上達しましたよ。最初はまったくできなかったが、みんなから教えてもらっているからね。
Ｃさん：私もエルファにきたのが再び朝鮮語を勉強しようと決心して 2 年前から韓国語の勉強を始めました。小学校 1 年生では朝鮮語を勉強したが、日常生活では日本語だったので忘れてしまってね。韓国語ドラマを見ても日本語の字幕に頼るしかなくて、もう 1

回自分の民族言葉をしっかり覚えようと思ってね。
エルファでは皆さんとなるべく朝鮮語で会話するので益々上手になっている気がしますよ。

朝鮮語を分からないスタッフにやさしく教えている在日コリアン1世たちの姿が見える。そして高齢になって母語学習を（再度）始め、熱心に勉強する姿を次世代に遺そうとしているのだ。やる気があれば年齢に関係なく、誰でも学習できるという強い生きる力を感じさせる。

もう一つは、午後3時になると、「子どもひろばアンネン」に通っている在日コリアン4世(1年生から3年生の生徒たち)が学校（朝鮮学校）から戻ってきて「ハルモニ・ハルボジ、アンネンハセヨ(おばあさん・おじいさん、こんにちは)。」と挨拶したり、話したりして賑わっている。その後、他の室でまず宿題をしてから5時まで遊んだりしている。筆者も去年の9月から子どもたちに朝鮮語を教えることになり、子どもたちと交流している。また月1回、エルファでは子どもたちと高齢者との交流の場を持つことを企画し、実行している。子どもたちが在日コリアン1世から昔話や遊び方を教えてもらったり、4世の子どもたちが民族舞踊を1世に披露したり、学校で起きたことなどを1世に伝えたりする。昔学校の門にも行ったことがない在日コリアン1世にとって学校生活は非常に神秘的で新鮮なことであり、色々聞いたりして交流の間を楽しんでいる。

事例15　A、B、Cさんについて

―　子どもたちに学校のことをよく聞きていると感じましたが、なぜですか。
Aさん：それはうらやましいからだよ。うちは小さい時にほんまに学校行きたかった！学校って何を教えてもらってるか聞きたくなるんや。今も行きたくてももう年よりだからへんし。だから子どもに質問すると学校のことや朝鮮語などをいろいろ教えてもらってるよ。(笑)
Bさん：小さい時は勉強が嫌いで、「学校に行きなさい」という母を憎んだけど、あの子たちを見るとなんか昔のことを後悔するね。もっと勉強すればよかったなあと･･･
Cさん：私が就学した時も、今も朝鮮学校は世間から白い目線でみられているが、あの子たちをみると日本の学校と変わらないなあと感じます。朝鮮語や在日歴史などを教えているので自分のアイデンティティもしっかり持てることもできるし、いいことだと思いますよ。

就学した経験がある人は昔の懐かしさや自分が情けなかったことなどを責めたりしており、学校の門にも行けなかった人たちは高齢になっても学校への憧れを持っていることが考えられる。就学期を日本の学校で送ってきた人には朝鮮学校では一体何を教えているかの疑問などから4世の子ども達との交流を通じて理解を深めている。また、謙遜なことに子どもからも学んでいることは2世、3世に感動を与えていると聞いた。「年は関係なく自分より優れていれば子どもも先生である」という 1 世たちの偉大な寛容と志を次世代に大きな財産として遺していると考えられる。

在日コリアン１世における母語学習の意義

3 人のライフ･ヒストリーにおける「語り」から言語学習がどのように行われたかを踏まえたうえで母語学習による自己再構築や母語学習の意義を述べていく。

1. 母語学習による自己再構築

母語に関する学習によって、母語文字の読み書きができるだけではなく、自分自身の社会関係の中での新しい位置を確立することでもある。また自己認識の仕方やアイデンティティの再確認・変化をもたらす行為となる。この過程が、母語学習による自己再構築である。

高齢化と共に、日本語を忘れ、母語以外でのコミュニケーションが困難となりつつある在日コリアン１世たちは、これまで朝鮮語で「話すこと」と「聞くこと」はできたが、母語学習を通じて更に生活のなかでの簡単な言葉や自分の名前を「書くこと」、「読むこと」ができるようになったことによって「自分が朝鮮人である」アイデンティティを再確認することができていく。朝鮮語を「話すこと」、「聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」ができない在日コリアン 2 世、3 世たちに比べて、在日コリアン１世たちの帰属意識はもともと高いレベルにあったが、それが母語学習を通じてさらに高まっていくのであろう。また、学習の中で共同学習者とともに自分史を語り、それを語り合うことによって共感しあう。それは、自信と誇りを回復し、記憶を再生していくことにつながる。母語学習は文字どおり「学ぶことは生きる力」であることを私たちに示している。

2. 母語学習の意義

現在、在日コリアンにとっての朝鮮語学習は、朝鮮学校での「バイリンガル」、即ち学校内だけでの朝鮮語になっている。また、朝鮮語を表記する手段は、朝鮮語文字(ハングル)から日本語の文字(カタカナ)へと移行している。カタカナで表記された朝鮮語が数多く登場するようになり、コミュニティ内部での民族的要素の伝達手段として定着している。これらのカタカナ朝鮮語は、在日コリアンの集住度が高い大阪生野などの地域での広告や商店街の看板などによく見られる。

介護サービスでも、文字(朝鮮語･日本語)を知らない 1 世と朝鮮語を知らない 2 世、3 世とのコミュニケーションをとるため、1 世の朝鮮語に対して 2 世、3 世はカタカナで表記しているのも現実だ。

しかし、「エルファ」で母語学習をしている在日コリアン１世たちが、朝鮮語を分からないスタッフの 2 世、3 世たちにやさしく朝鮮語を教えている姿、高齢になっても母語学習を（再度）始め、熱心に勉強する姿は、やる気があれば年齢に関係なく、誰でも学習できるという強い生きる力を次世代に遺している。また、世代間交流のなかで 1 世たちが謙遜なことに 4 世の子どもからも学んでいることは 2 世、3 世に「年は関係なく自分より優れていれば子どもでも先生である」という偉大な寛容と学びの志を次世代に大きな財産として遺していると考えられる。母語学習によって高齢者は学びの意義、喜びと自己回顧、再構築、統合を受け、アイデンティティを再構築し、そのような高齢者による次世代への語りは、次世代に生き抜く力や知恵を「遺す」という感覚につながっていく。母語を学習する誇り高い民族の姿であると考えられる。

また、「奪われた文字を奪い返す」という概念から「奪い返す」より、自分の民族的アイデンティティの再確認、学習によって学びへの喜び、同世代、次世代と語り継ぎながら「自分のまま」に生きる喜びでもあろう。

母語学習の展望

在日コリアン１世の母語学習は、主に夜間中学校、オモニ学校などで行われているが、「エルファ」のようなＮＰＯ施設や日本の地域社会の生涯学習施設などの場においても実施されることが望まれる。それは以下のような理由による。識字学習の場を通じて、在日コリアン１世の「読む」、「書く」ことに止まらず、自分史の学習や、戦争体験をまとめたり、書くことと話すことを結びつけた「語り」を一つの学習方法として、高齢者に語る時間と空間の場を創造していくことが重要だからである。

また、ＮＰＯ施設は１世の高齢者に単なる居場所作りとなる「お楽しみ」の時間提供だけではなく、1 世たちが自ら発信して学習し、「語り」を取り込むことで、創造性を持つ必要がある。そして、これまでの計画された活動に参加するという消費者的、受身的な参加ではなく、1 世自らが発信することのできる創造性を持ったプログラム作りが求められている。そこに１世が築いてきた知恵を次世代に遺していく方法が見えてくるのではないだろうか。そのためには学び場を創設し、一定の枠にはまった学習を提供するのでなく、常に発展し、創造していく学習を目指す必要があるのである。

結論

本論の最後にＮＰＯ施設「エルファ」で母語の識字学習をしている３人のケースから読み取った事柄を整理し直し、結論としたい。

(1)　在日コリアン１世の母語学習意欲

在日コリアン１世は、朝鮮人である民族的アイデンティティをしっかり持っており、在日コリアン１世にとって母語は、帰属意識（自己同一性）の象徴である。また、生活のなかでは朝鮮語と日本語を併用しつつも、バイリンガルである１世同士の会話の中では朝鮮語のみで会話されることがわかる。しかし、植民地支配による差別や貧困により未就学、非識字者である人が多いことは言うまでもない。

戦後、在日コリアン１世に対して夜間学校、オモニ学校で独自のカリキュラムが組まれ、母語学習が行われたが、そこでの学習への参加は、強い学習意欲を持つ在日コリアン１世に限られていた。最近においては在日コリアン１世の文化・生活背景に合うサービスを提供する介護福祉施設が民族団体やＮＰＯ法人によって日本各地に設立され、在日コリアン１世の識字学習は夜間中学校だけではなく、これら福祉施設のなかでも様々な形で行われている。これらの各福祉施設等における識字学習は、「母語の読み書きができない在日コリアン１世にせめて自分の名前を書けるようにとの２世達の思い」など様々な動機から導入されたものがあるであろう。導入の動機が何であったにせよ、文字を学ぶ喜び、自分の名前が書ける喜びを味わった高齢者たちは、自ら学習機会を求め、強い母語学習意欲を示すようになった。この背景には、高齢になって自らの人生を顧み、未就学等で非識字の状態を強いられたことに対する無念も一因であ

るかもしれない。在日コリアン１世たちが高齢者になって母語学習意欲が高まってきたのには以上のように理由がないわけではないのである。

(2) 「エルファ」で母語識字学習をしている３人のライフ･ヒストリー

3 人へのインタヒューを通じて「エルファ」での学びを自主的民間の学校での母語学習と比較しその特徴をまとめた。

①オモニ学校での母語学習参加は、強い学習意欲を持つ在日コリアン１世に限られているが、「エルファ」での参加者は介護サービスを受けている全体の在日コリアン１世を対象にしている。また、ほかの夜間学校や語学学校みたいにきちんと組まれたカリキュラムや教科書などではなく、朝鮮語文字や実際の生活で使われている単語、自分の名前などの内容をスタッフたちが作成した印刷物でごく自然でシンプルな学習スタイルであり、月１回の朝鮮語の読み書きと週１回の朝鮮語の書き取りを通じて１世たちが少しずつ読み書きしている。そして、共同学習者とともに自分史を語り合うことによって共感し合っている。

②世代間交流での学習では、朝鮮語ができない 2 世、3 世のスタッフに朝鮮語をやさしく教えたり、謙遜に 4 世の子どもから朝鮮語文字も学んだり、昔話や遊びを教えたりすることから、高齢になって母語学習を始め､熱心に勉強する姿や｢学ぶことには年齢は関係なく自分より優れていれば子どもでも先生である｣という１世たちの偉大な寛容と志を次世代に伝えている。

(3) 在日コリアン１世における母語学習の意義

在日コリアン１世高齢者たちは、これまで自分の名前を朝鮮語で話したり聞いたりはできたが､書いたり読んだりすることができなかったのができるようになったことによって｢自分が朝鮮人である｣アイデンティティを再確認することができていく｡学習を通じ共同学習者とともに自分史を語り、それを語り合うことによって共感しあう。それは、自信と誇りを回復し、記憶を再生していくことにつながる。母語学習は、文字どおり｢学ぶことは生きる力｣であることを私たちに示し、母語学習による自己再構築ができた。

もう一つは、自分が若年者の将来のために何を｢遺す｣ことができるのか、何を｢遺す｣べきなのかという感覚の発生である。次世代への語りの中で生き抜く力やそのために必要な知恵を授け､育む事を通じて､老年期における自らの課題を得ることができればそれは生き甲斐となり、重要なことであると思われる。

このように在日コリアン１世が高齢になって、母語を学習するのは、ただ｢奪われた文字を奪い返す｣ことが目的ではない｡母語学習を通じて自分の名前や生活のなかで使われている簡単な文字などを朝鮮語で読み書きできるようになったことで、学びへの喜びに目覚め、世代間交流に生き甲斐を見いだし、民族的アイデンティティを再確認したうえで、自らの｢生｣を自らの言葉で読み書き、語り継ぎながら、｢朝鮮人のまんま｣生きる誇りであると考えられる。

また、｢エルファ｣のようなＮＰＯ施設や日本の地域社会の生涯学習施設においての場でも実施されることが望まれる｡その理由は､母語学習の場を通じて､在日コリアン１世の｢読む｣､｢書く｣ことに止まらず、自分史の学習や、戦争体験をまとめたり、書くことと話すことを結びつけた｢語り｣を一つの学習方法として、高齢者に語る時間と空間の場を創造していくことが重要だからである。

【参考文献】

姜在彦『姜在彦在日論集「在日」からの視座』新幹社、1996
田中宏『日本の社会保障、学校教育と国籍』龍谷大学、2006
ＮＰＯ法人神戸定住外国人支援センター『在日マイノリティ高齢者の生活権：主として在日コリアン高齢者の実態から考える～』新幹社、2005
原尻英樹『在日朝鮮人の生活世界』弘文堂、1989
原尻英樹『日本定住コリアンの日常と生活:文化人類学的アプローチ』明石書店、1997
生越直樹『移民コミュニティの言語の社会言語学的研究　研究成果報告書(2)「在日コリアンの言語」』、2007
川村湊『生まれたらそこがふるさと：在日朝鮮人文学論」平凡社、1999
法務省入国管理局「平成 18 年末現在における外国人登録者統計について」、2007 http://www.moj.go.jp/PRESS/070516-1.pdf
世界言語権宣言について　http://www.linguistic-declaratiom.org
『ＮＰＯ京都コリアン生活センター「エルファ」5 周年記念誌』2006、ほかの資料